

子どもが主語に 元気・やる気・根気を育む学校

～教職員・保護者・地域の“三笑”で支える共育の推進～

I はじめに

学習指導要領で求められている育成すべき資質・能力の柱は以下の3つです。

- 生きて働く「知識・技能」
- 未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」
- 学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」

知識はもっているだけでは無意味で、それらを活用し、主体的・対話的に学びを深めながら、自身の人生や未来を切り拓いていく力を育てなければならない、というわけです。

上記3つの資質・能力の中で、最も育成が難しいと感じるのは、「学びに向かう力」です。児童自身が内なるエネルギーを自ら方向付けなければならないものであるからこそ、難しいのだと思います。

第三小学校の児童アンケート（魅力ある学校づくり調査より）結果を見ると「授業に主体的に取り組んでいる」という項目への肯定的回答の平均値は43.6%となっており、多くの児童が学びに対して受動的であることがわかります。

要因は一つではなく、個々が抱える困り感も様々であることは自明です。しかし、シンプルに考えた時、「主体性」を育むためには、まずは「元気」（エネルギー）が不可欠です。食育（給食）を通して食の大切さの理解を深め、実践につなげていく子どもを育てたいと考えます。これには保護者の方のご理解ご協力が欠かせません。また、学年・教科担任制で関わる大勢の教職員から様々な場面で褒めシャワーを浴びせ、心の元気も養っていきましょう。各ご家庭・地域も同様の姿勢で子どもたちへの言葉かけをお願いしたいと思います。体と心が元気になれば、「やる気」（意欲）も湧いてきます。「やってみたい」と思わせる仕掛けを皆で工夫していきましょう。子どもの心に如何に灯をつけるか、教員の一番の腕の見せ所です。しかしながら、挑戦が必ずしも成功につながるとは限りません。失敗を繰り返しながら学ぶからこそ、学びは深まり、心身ともにたくましく育っていくものです。でも、「根気」（粘り強さ）がないと、子どもたちは簡単に諦め、挑戦をやめてしまいがちです。子どもたちに関わる大人全員（教職員・保護者・地域）が、「結果」だけでなく、「過程」を認めていく姿勢をもって、子どもたちの「根気」を育み、「もう一度やってみよう」「次はこんな風にしてみよう」と挑戦し続けられる子どもたちを育てていきましょう。「根気」は人間関係形成においても大切な力です。多様性を排除せず受け入れる心の育成に努めるとともに、他者との関係づくりを面倒がらず、投げ出さず、努力できる子どもたちにしていきましょう。

本校では上記の考えのもと、教職員・保護者・地域が連携しながら、子どもたちの「元気・やる気・根気」を育み、全教育活動を通して「主体性」と「協働性」を身に付けさせていきます。

The mediocre teacher tells.	平凡な教師は言っただけで聞かせる。
The good teacher explains.	良い教師は説明する。
The superior teacher demonstrates.	優れた教師はやってみせる。
The great teacher inspires.	偉大な教師は子どもたちの心に火をつける。(ウィリアム・アーサー・ウォード)
※子どもたちの心に火をつけ、前向きな生き方へと導ける教師を目指していきましょう。	

II 目指す学校像・児童像・教職員像

1 目指す学校像と基本方針

(1) 児童が安心して表現し、他者と協働しながら自分を伸ばすことができる学校

どんな意見にも耳を傾けてもらえる安心感のある集団作り（絆づくり・居場所づくり）と、より良い考えを練り上げていこうとする学びへの姿勢づくりを行っていきましょう。
あらゆる教育活動をこの視点から推進し、全ての児童の学びに向かう力を伸ばし、人間性を育みます。

(2) 安定した環境の中で楽しい生活を築くことができる学校

事故や怪我の無い学校、体罰や不適切な行為の無い学校、いじめや不安を感じたらすぐに相談できる学校、災害等に備える学校。

全ての児童が安全・安心の中で生活を楽しめるように全教職員で児童を見守り支援し、情報共有します。

(3) 信頼される学校

サービスの厳正を徹底するとともに、傾聴を大切にしながら「納得」と「信頼」が得られるように努め、保護者・地域の方々と連携していきます。そうすることで、教職員・保護者・地域が笑顔で手を取り合い（“三笑”）子どもたちを共に育てる（共育）環境が整えられるものと考えます。

2 目指す児童像【教育目標より】

◎情操の豊かな子ども【自己肯定力・他者肯定力】

→思いやりの心を持ち、自他ともに愛せる子ども

○自主的に学ぶ子ども【課題設定力・解決力】

→自ら課題を設定し、学び続ける子ども

○明るく健康な子ども【心身の健康増進力】

→楽しみながら運動し、健やかな心身をつくる子ども

3 目指す教職員像

(1) 自身の役割（校務）を自覚するとともに、当事者意識を持ち、組織的に行動する人

職層に応じて求められる目標をしっかりと捉え、その意義を理解して自分の役割を果たし、主体的な組織集団の一員として力を発揮する人

(2) 自己の能力を開発・向上させる人

教材研究、児童理解を常として、授業力・指導力の向上に努めるのみならず、課題を発見し、新しいことにもチャレンジする人

子供に求めることは、自らも行う（その努力をする）人（率先垂範）

(3) 子供・保護者・地域等から信頼される人

子供・保護者・地域の方々と真摯に向き合い、納得と信頼を得る努力をする人

III 令和8年度の教育活動

【指導の重点】

★教育活動全ての土台となる大切な姿勢として…

・心を整えるための指導を通年で実施 ⇒聴く・挨拶・整理整頓

・「聴く」指導の徹底

：口を閉じて目を向ける、頷く等の反応をしながら聞く、といった態度を示すことが、相手を受け入れているというサインになっていることを理解させ、身に付けさせていく

：何を言っても馬鹿にされない、笑われない、と安心して発表できる学年・学級づくりをする

・「挨拶」指導

：全児童が、誰に対しても「**あ**かるく・**い**つでも・**さ**わやかに・**こ**づける」ことができるように、全教職員が自ら範を示して挨拶をし、指導していく。

・「整理整頓」の習慣化

：全学年共通の指導として、靴箱への靴の入れ方を粘り強く指導していく。

(1) 豊かな心の育成のために

① 尽くす喜びの指導

・グループ活動、清掃活動、たてわり活動 等での実践を見逃さずに認め、励ますことで、自己有用感・自己肯定感を育み、協働への意欲を向上させる

② 道徳科の授業の充実

・自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考える議論する道徳授業を充実させ、自己理解や他者理解を深めるとともに、社会性を育てていく。

③ 思いやりの心と態度の育成

・他者理解、SSTによる円滑なコミュニケーション力の醸成など

④ 児童が SOS を出しやすい環境づくり

・学年団の先生や SC、SSW、ケヤッキールームの方々等、多くの教職員との関係構築を図り、一人一人への声掛けを大切にしていきたいと思います。

(2) 確かな学力の育成のために

① 学ぶ意欲を高める

・教科担任制の更なる充実を通して、授業の質の向上と子どもの学力向上を図る。

・「分かった」「できた」と実感できるまで取り組ませ、達成感を味わわせる

そのためには、分からないことを臆せず言える集団作りに努めること

授業中の形成的評価を大切に、児童の発言や記述等を見逃さずにねらいに沿って価値付け、褒めること

・「視覚的資料の提示」「意外性」「必然性」「葛藤場面」など、児童をひきつける課題提示の工夫をすること

・授業の UD (ユニバーサルデザイン) 化を図り、個に応じた支援を充実させること (合理的配慮の充実)

・地域学校協働本部コーディネーターと連携し、地域資源や人材を活用した学習内容を取り扱い、学ぶ意欲と地域社会の一員としての態度の育成を一体的に図っていく。

② 思考力・判断力・表現力を高める

・自力解決の時間を保障し、ノートや iPad 等にかかせ、交流し、考えを深める学習活動の充実を図ること

考えを「もつ」「表す」「伝え合う」「深める」授業実践を積み重ねること

・書くことに苦手さをもつ児童でも課題に向き合えるようにする支援を工夫し、誰も取り残さない学習活動を目指す

→「思考を深めるため」「個別最適な学習のため」にタブレット端末をどのように活用していくか。授業で紙媒体とのバランスをどのように考え、扱っていくと、児童の学びが深まるのか考え、情報共有していきましょう。

・言語表現の基礎となる、国語の「知識及び技能」の指導を確実に行うとともに、読書活動の推進や日常的な言葉遣いの指導等を通して、言語感覚を育成し、豊かな言葉を獲得させていく

→「教師自身が言語環境」という意識を忘れずに、指導していきましょう。

4月現在、学校司書さんが未配置ですが、「朝読書」を全学級で確実に取り組み、読書旬間を充実させていきましょう。

- ・情報モラルとセットで情報活用能力を高めていく

③学び方や考え方・学習習慣を身に付ける

- ・国語の「話すこと・聞くこと」「書くこと」の指導を確実にを行い、他教科・領域等で活用して言語能力を着実に伸ばし、身に付ける
- ・「知識」「技能」を習得し、活用できるようにする
- ・単元を通して「見方・考え方」が育つように、授業終末のまとめを工夫し、児童自身「何を学んだか」「何が身についたか」を自覚できるようにする。

※以上の事柄が見える板書や思考の足跡が見えるノート指導等を工夫し、実践する。

※家庭学習の仕方を指導するとともに、保護者と連携しながら個々の能力や状況に応じた課題内容及び量の調整を行う等して、学習習慣の定着化を図る。

(3) 健やかな体の育成のために

①体力を高める

- ・体育の授業や一校一取組（マラソン旬間）、スポーツ鬼ごっこやダブルダッチ等を通して、体を動かす取り組みを充実させる。

②気力を高める

- ・小さくても成功体験を積みながら自己有用感を育てる。また、粘り強く取り組む姿勢や失敗から学ぼうとする姿勢を是とする価値観を養う。

※上記の取り組みを学校運営協議会において共有しつつ、地域の宝である子どもたちの育成を学校・保護者・地域が連携し、共通理解しながら推進していけるようにする。